

序

人の手によって書かれたもので人に理解されぬものは存在しない、私は日々そう信じて、画像所見を文章に翻訳する作業を行っています。しかしながら画像が臨床現場の依頼に即した情報をもつか、というのはまた別問題で、それには適切な臨床診断、その鑑別疾患に対応したモダリティや検査方法の選択が必要となります。ただこれらのレポート作成やオーダーに関する内容は本書の主たるテーマではありません。

私が放射線科を志した初期研修医時代にはすでに、腹部CTは臨床現場で大きな意味を持っていました。しかしいざ自分で読影をしようと思っても、多量の画像データの中にある種々の臓器をどのように目を通せば見落としがないように読影できるのかわからず、またそのなかに紛れ込む疾患の検出も、その解釈も難しく、いつも困っては放射線科の先生方に尋ねていました。そのときから今に至るまで、多くの先生方から教えて頂き、暗中模索しながら自分なりに修正してきた腹部CT画像の「読影方法」、それを初学者の方にお伝えすることができないか、という思いから本書の執筆がはじまりました。

ある地域に関して全体像を把握し、どのように各所を回れば効率がよいかを提示し、そして各観光地ではこのようなところを重点的に見ればよい、と示したものが観光ガイドブックであるなら、それを腹部CTに関して示したのが本書です。すなわち、見知らぬ土地の回り方を学ぶガイドブックのように、CT画像を系統的に読影する方法を習得し、異常所見を「検出」する段階に重きを置きました。特に初学者においては、この検出が一つの大きな課題となり、そもそも発見できなければその先にある画像の解釈に進むことはできません。したがって、腹部CTにおける各臓器の回り方を具体的に提示し、その通りに臓器を回ることで見落としの少ない読影方法を習得してもらう、というのが本書の主たる目的となります。そのうえで、各臓器にはチェックすべき要所があり、これに着目してもらいながら実際の画像に目を通すと、しだいに異常所見が検出できるようになっていくはずで

「どの作品も似たような内容だ。しかしどの部分を切りとって読んでもおもしろい」ある作家を評してそう語る友人がいました。潔癖症的な私の性格からは、小説を前から順に読む以外の楽しみ方があるのだと当時は感銘を受けました。読書をはじめて四半世紀が経過し、ようやく私もランダムにめくったページから楽しみを覚える作品も増えてきました。私の尊敬する放射線科の先生方のなかには、系統的な読影方法はなく、大まかに画像に目を通すと異常所見の方から目に飛び込んでくるのだと言う方もおられ、先の読書の方法に通じるものがあるのかもしれませんが、円熟していくほど自由になっていくということもあるでしょうし、その点で私が本書で提示した読み方がただ一つの正解であるとは微塵も考えておりません。しかしながら系統的な読影方法が一つ具体的に提示されることで、当時読影のとっかかりをつかむのに苦労した私のような初学者に何か伝えることができたなら、これ以上の喜びはありません。ひとたび歩きはじめたら、あとは自由に足が進んでいくことでしょう。

最後になりましたが、ご多忙のなかで監修を快く引き受けてくださった恩師の山崎道夫先生、カバーイラスト作成時に私の拙いイメージ図を具現化してくださった谷村賢太先生、企画から校正に至るまで私の潔癖症的な細かい相談に乗ってくださった羊土社編集部の藤澤優様、鈴木美奈子様、いつも私を支えてくださる滋賀医科大学放射線科と同門の先生方、私の文章を何度も確認し適切な助言をくれた妻、そして執筆中に元気に生まれてくれた娘（もちろん出産を無事に乗り越えてくれた妻に再度）、皆様に心から感謝を捧げます。

2024年2月 山鳩鳴く

滋賀医科大学 放射線医学講座
沖 達也